

井上三朗教授の思い出

末 松 壽

井上三朗さんの死去を私が知ったのは2012年5月20日の夕刻でした。それは山口日仏協会にとって年に一度の総会の日で、総会終了後の年度第1回の役員会を終え、それにつづく懇親会にはいる準備の合間でした。突然の訃報、浮かぶ面影、いくつかの切れ切れの思い出..... 会長の任にある私はその場を離れるわけにゆかず、通夜に列席することはかなわず、翌日の葬儀の時刻と会場とを確認することしかできませんでした。

思えば井上さんと私とは一昔前、1980年4月、「フランス語学・フランス文学学科目」が新設された山口大学人文学部に同時に赴任いたしました。大阪外国語大学、次いで京都大学大学院でフランス文学の研鑽を積んでいらした彼にとっては最初の専任講師の職で、私のほうは福岡の私立西南学院大学教授ポストからの転任でした。

新しい学科の立ち上げがどんなことなのか想像してみてください。私たちは新品の事務机、椅子、書架の入った真新しい個人研究室で、そして同じく真新しい上記仏語仏文の研究室で、これから毎年やってくる新しい学生たちの指導にあたることになったのです。学科目にかかわる全てについてその望ましい姿を思い描き、それを目指して話し合い、構想し、計画し、組織して行かなければなりませんでした。

まず学科目全体にとって必要な書物からはじめて、一定のごく限られた予算ですが、計画的に資料をそろえてゆかなければなりません。それにももちろん研究者である二人それぞれにとって必要な書物もあります。蔵書はまた年に一度は、学生を動員しこれを指導して目録と対応させて点検し、有無を確かめるとともに、乱れた配列を正さなければなりません。

研究室＝図書室＝演習室の清掃も怠ることはできません。これらすべては私どもの私物ではなく国から委託されたものであって、私どもがいなくなっても存続してゆくべきものだからです。

物的な配慮に劣らず重要なのは学生の指導のあり方です。私たちは授業科目のあいだでの担当の調整、卒論指導の仕方や卒論発表会の開催、集中講義にまねく研究者の人選、そのほか万事にわたって話し合い、計画し、実施してゆきました。場合によっては一年次の教養課程でフランス語を全く習得せずに当該学科目に進学してくる学生もいました。そのようなとき、井上さんは進んで特別レッスンを、いうまでもなく無報酬で引き受けてくれました。

研究については、井上さんは、米国生まれでフランスに帰化したカトリック作家のジュリヤン・グリーンの小説について研究をつづけなさいていました。また同じくカトリック作家であるモーリヤックについても。また次第に大まかに言って「無神論」作家とされるサド侯爵、サン＝テグジュペリ、カミュなどへと関心をひろげ—とはいえサドの場合にはもっとはるかに遠い起源があつて、早熟な高校生であった三朗さんは、すでに翻訳書を通じてこの小説家に出会っていたということです—、さらに近年には日本の遠藤周作、福永武彦、高橋たか子、瀬戸内晴美寂聴、丹羽文雄などについての論文も見られるようになっていました。

私の解釈では、これらの作家に通底するテーマ、すなわち人間のいわゆる「生き方」についての思索、探究、表現が、結局井上さんの文学者としてのそして何より人として生きるに値する最大の問題であったからだと思うのです。作中人物の有り方、振舞い方、考え方をめぐり、彼のとりわけ心理的・モラル的分析への情熱、こだわり、鋭さには、私自身は多少の距離をおきながらも、感嘆すべきものがありました。2002年には一つの集大成として『ジュリアン・グリーン研究序説』、396頁（京都：人文書院）が公刊されています。これはその前年に京都大学で博士号を取得なされた論文に加筆・訂正されたものであります。

私自身は、13年間を井上さんと一緒に山口大学ですごした後、他の大学に移ることになり、それから10年間にわたってほとんど会うことはありませんでした。停年退官（2003年3月）の後、山口市に落着いた私は、山口大学仏語仏文の研究室所蔵の資料を借用させていただくことがあって、その後10年近くのあいだ井上教授にときどきお目にかかるようになりました。また先に述べた山口日仏協会の文化講演会でも一度、『星の王子さま』についてのお話をお願いしたことがありました。あまり開けっぴろげでなく、むしろ寡黙でひそやかな雰囲気の井上さんでしたが、研究室を訪れるといつもコーヒーやお茶を御馳走してくれました。私たちは以前よりもっと寛いでお互いの当面の仕事、フランス文学や日本文学、またお互いの家族、子供たちのこと、行く末のことなどを語り合いました。

近年彼は1972年（昭和47年）—昭和24年生まれの三朗さんはこの時期、言ってみれば「青春時代のまん中」にいらしたのです—のいわゆる「日本赤軍」のいわば断末魔の事件に多大の興味をよせていらして、研究室では事件関係の文献をよく見かけました。これまた彼における人の生き方—おそらくその社会性を帯びた、すなわち個人と集団のかかわり方の側面—への関心を示すものだったかと思われまふ。そしてそこには、おそらくおのれの青春時代の消え去った日々に対する一抹の哀惜の念がひそんでいたのではないのでしょうか。

考えてみれば、井上三朗さんは私にとって結局はもっとも頻繁にかつもっとも深く交際した同僚であったかと思ひます。彼は、私どもがその中でもがいているこの曖昧模糊とした世界、歴史そして人生をあっという間に駆け抜けてしまいました。もはやあのよく響く声を聴くことはできません。今は心より冥福を祈るばかりです。

（2012年10月14日 山口にて）